I am a DOLL

布袋しぐれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｉ ａｍ ａ ＤＯＬＬ

【Ｎコード】
Ｎ８０２９Ｗ

【作者名】
布袋しぐれ

【あらすじ】
アイドルに憧れる、少女。

事務所に入って、二年。

デビューの音沙汰もなく、兆しもなく。

平凡すぎる、恵まれない生活に悔しい思いをしていた。

そして、突如として舞い込んだ、究極の話。

主な登場人物

☆　小守（こもり）　愛美（めぐみ）

十五歳で事務所イン。
ダンス、歌のレッスンをつむも、中々実らず。
同期の練習生がデビューするのを、苦汁を飲んで耐えてきた。
ただ直向（ひたむき）なだけが、とりえ。
ストレートで綺麗な黒髪が特徴。

誕生日　２月１４日
年齢　十七歳
身長　１６０？
体重　５６？　（ストレスの為少し増加中）
※事務所インの当時は、５２？

芸名　メグミ

★　金（キム）　慧彬（ヘビン）

十七歳のとき、アメリカでスカウトされて、そのまま日本の事務所に入った。
アメリカでの名前は、ヘビン・キム・クリスティーン。
よく、ケビンと、間違えて呼ばれる。
初対面から、愛美（めぐみ）に若干の恋心に似たものを、抱いている。
父親が韓国人で、母がアメリカ人だけあって、容姿はハーフ独特の魅力がある。
かなりの甘党で、なぜかいつもココアかチョコレートを持ち歩い

ている。

誕生日　２月１日
年齢　十九歳
身長　１７９ｃｍ
体重　６０？

芸名　ヘビン

★　ノーライシン・パーニット

タイの中部チャイナート県、ムアンチャイナート郡出身。
首都バンコクの街中で、突然スカウトされたのがきっかけ。
タイや中国、インドネシア等でデビューするも、十六歳のとき引退。
その後、普通に高校を出て、進学するも大学を中退。
二十三歳のとき日本に移住。そのとき、事務所関係者が彼だと見抜き、半ば無理やり事務所イン。

誕生日　１月１２日
年齢　二十五歳（ただし童顔な為、未成年に間違われる）
身長　１８２ｃｍ
体重　６３？

芸名　ノラ

★　桐谷（きりたに）　秦（しん）

シンガポール生まれ、アメリカ人の日系の男の子。

よく出てくるのは英語で、しかも（現地独特の）訛りがあるので、かなり難解。
黙っていたら、万人受けのいい、まさしく美少年。
自らの意思で、事務所インした子。
なぜか、歌舞伎役者に首っ丈。
天然っ子な、どこかつかみにくい愛嬌のある子。

誕生日　１月１８日
年齢　十八歳
身長　１７７？
体重　５５？

芸名　シン

♪　Ｋ（ケー）Ｆｌｙ（フライ）

愛美（めぐみ）と同期の練習生、ふたりの所属するグループ。
デビューしてすぐ、そのビジュアルと、ダンスで注目を浴びる。
平均年齢２０歳の、超人気女性グループ。

メンバー
☆ケミン（リーダー、アメリカ人）
☆ファン（リードヴォーカル、タイ人）
☆リカ（日本人、愛美（めぐみ）と同期）
☆ユミ（日本人、愛美（めぐみ）と同期）

♪　ＩＭプロダクション

インターナショナル・ミュージック・プロダクション。
アメリカ・韓国・中国・タイ・シンガポール・インドネシア、六カ国にも支部を置く、国際派事務所。
そのため、常に事務所には通訳がいる。
近年のヒットを作り出している、いわば今、ホットな事務所。

♪ Ｓ（エスフォー）－４

ＩＭプロダクション、最大のヒットを飛ばした、常に話題のグループ。
４となっているが、ひとり引退してしまったので、今は３人。
正式名称はＳｕｐｅｒ４
ダンスが魅力の、男性ユニットとして、今は活動中。
なお、メンバーの一人は父親になっている。
デビューしたときの平均年齢は２２歳。
現在、平均年齢３０歳。大人の魅力がコンセプトになっている。
歌えば必ず、１０万枚は売り飛ばす。
最大ヒットは、デビューしてから三枚目のシングル、『ＫＩｓｓ ＡＮＤ Ｈｕｇ』で２００万枚。

メンバー
☆リー・ホァイエン（リーダー格ではあるが、正式にはリーダーではない。中国系。現在、一児の父。）
☆ジュン（ダンスはかなり上手い。日本人であるが、母方にアメリカ系の血筋を引く）
☆アキラ（童顔であるのが悩みの３０歳。変声期がおかしく、今も声が高い。日本人）

☆クリム・D（脱退したメンバー。クリム・ディーン。リーダーだった）

☆活動楽曲☆（歌詞）☆Ｉ－　Ｌｅａｐ☆（前書き）

※作詞はすべて、布袋しぐれオリジナルです※

☆活動楽曲☆（歌詞）☆Ｉ－　Ｌｅａｐ☆

♪デビューシングル

『ｂｅ　ｂｏｒｎ　ａｇａｉｎ』

Ｒａｐ）Ｂｏｙ　Ｉｔ　ｉｓ　ｈｅａｒｄ？
Ｏｐｅｎ　ｅｙｅｓ．
Ｏｐｅｎ　ｅｙｅｓ．
Ｌｉｓｔｅｎ　ｔｏ　ｔｈｉｓ　ｓｏｎｇ．
Ｈａ　ｈａ　ｙｅａｈ，ｃｏｍｅ　ｏｎ！

君の心を揺さ振る
うるさげな　音楽
いらない飾りなんて　いっそう　取り除いて
裸のまんまでいいじゃない

嘘ついて　傷つくのは結局　君
なら　いっそう　楽しいほうがいいじゃない

Ｈｅｙ，　Ｃｏｍｉｎｇ
目なんか閉じないで
思いっきり叫べば良い
好きな感じに
（ｍａｋｅ　ｔｏｇｅｔｈｅｒ．）
僕にはそう
Ｂｅｃａｕｓｅ　ｙｏｕ　ａｒｅ　ｒｅｑｕｉｒｅｄ
Ｈｅｙ，　Ｃｏｍｉｎｇ

君の頭を支配してる
余計な　お話
他人のことなんて　いっそう　忘れてしまって
ありのまんまでいいじゃない

他人なんかに　塗り固められて　君
そう　いっそう　汚いほうがマシ

Ｈｅｙ，　Ｃｏｍｉｎｇ
目なんか閉じないで
思いっきり叫べば良い
好きな感じに
（ｍａｋｅ　ｔｏｇｅｔｈｅｒ．）
僕にはそう
Ｂｅｃａｕｓｅ　ｙｏｕ　ａｒｅ　ｒｅｑｕｉｒｅｄ
Ｈｅｙ，　Ｃｏｍｉｎｇ

Ｒａｐ）　？？？？　？？
？？　？？？？　？？？？　？？
ひとつになって・・

Ｈｅｙ，Ｂｏｙ　（ａｎｄ　Ｇｉｒｌ）
真面目なこと
今日は忘れて
（Ａｐｐｌｙ．）
Ｉｎ　ａ　ｄｉｆｆｅｒｅｎｔ　ｃｏｌｏｒ

Ｉｔ　ｗｉｌｌ　ｂｅ　ｂｏｒｎ　ａｇａｉｎ．

★★★

Rap)　??　??　??　???

??　??　???　????　?

??　?

空に願った　君の幸せ　　泡みたいに消えて

When not feel if

この痛みから自由になれるんだろうか？

苦しみ足掻く　この日常から

僕らは抜け出せるの？

Bodies in the wings

It still hurts from the fly

Your body can not support

レッスン　01

誰よりも劣っていた。歌も下手だし、ダンスも下手。どんなに鏡ばかりの部屋で練習しても、映るのはへな猪口な動きをする自分の姿。

憧れて、事務所に入ったのに。これじゃ、一生、スターになんか、アイドルになんかなれない。

それどころか、最近はストレスで体重も増えてるって言うのに。

午前４時。

リハーサル室に、スニーカーの摩擦音が、かわいらしく響く。時々、水音を含むみたいな、軽い音も混じって。それは一瞬、楽しげに聞こえる。

たった一人で練習している女の子。その、黒い髪を束ねているのは、小守愛美（こもり めぐみ）。今年、十七を迎えたばかりの、女の子だった。

十五歳で、事務所に入り、早二年が経過した。

憧れて入ったは良いものの、レッスン費用がかさむばかりで、中々実らないのが現実。同期の練習生たちは、どんどんデビューしていった。スターになった子もいるし、引退するほかなくなった子もいた。知る限り、数え切れない子たちが旅立っている。

どうして自分だけ、まだデビューできていないのか。

練習だって、人の何倍もしているはずなのに。

スニーカーのつま先は、赤く変色している。元々、緑色の可愛い靴だったが、すっかり生々しい赤に染まっている。練習の結果だ。肉刺（まめ）が潰れて、血が出た。それだけであるのに、どうしてこうも惨めに見えるんだろうか。

ぼうっと、考えていたときリハーサル室の扉が開いた。

「おはよう、熱心ね。出て行ってもらえたら嬉しいわ。もうすぐ

KFlyが新曲の練習を始めるから」
「分かりました」
「あ、そう。ここ掃除しといて。モップの場所は分かるわよね？」
「はい」
なんて、惨めなのかな。練習することもできないなんて。私、デビューしたいのに、悔しい思いばかり。早く、舞台に立って――――・・・・
「お疲れ様、愛美。悪いけれど、出て行って。もうすぐ振り付け師来るから」
「はい」
こういうたびに思う。私、練習生よねって。私は執事でもメイドでも奴隷でもなんでもなく。練習生よねって。

それを考えるたびに、悔しさが募るの。

レッスン　02

どこか突然だった。
その日の午後、初めて事務所から呼び出しをくらった。
学校の校門の前、友達と分かれてすぐだったから、まさか切られるんじゃないかって一瞬思った。こんなつぼみすら、まだつけていない練習生ですもの。抱えていても、ただ人件費の無駄だって言われても仕方ないだろうし。
どこかいじけた心もちで、事務所に向った。
事務所へは、学校から出ている路線のバスで、いける。三つ向こうの駅で下りればいい。

『愛美（めぐみ）さんね？皆さん、揃っているのよ。悪いけれど、練習着に着替えたら、すぐにレッスン室に来て』
そういわれて、どこかヒステリックな女性は、私にロゴの入った、どこか悪趣味なジャージを渡した。そういや、デビュー直前（息のかかった）、練習生たちはこういうのを着ていた気がする。
まあ、気だけかもしれないが。
さっさと着替えて、レッスン室に向う途中、色白で同じジャージを着た男の子を見た。
男の子は、どこか可笑しげに笑い、ウィンクを飛ばしてきた。
「ｉｔ　ｉｓ　ｓｔｒａｎｇｅ　・・・　ｔｈｉｓ　ｊｅｒｓｅｙ.（ヘンなジャージだよね）」
「え？」
「ｍｅ　・・・　ｈｅ　ｉｓ　ａ　Ｊａｐａｎｅｓｅ　ｏｎｃｅ.　Ｙｏｕ？（僕、一応、日本人なんだ。君は？）」
「・・・Ｐａｒｄｏｎ？　Ｉ　ｄｏ　ｎｏｔ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ　Ｅｎｇｌｉｓｈ.　（え・・・？私、英語は分からないの・・

）」
「・・Ｒｅｇｒｅｔｔａｂｌｅ．　Ｔａｌｋ　ｔｏ　ｙｏｕ　ｌａｔｅｒ．　（残念・・じゃあ、またね～）」
彼は手をひらひらとし、バイバイと声を出さずに呟いた。
どこか不思議なにおいのする男の子。
面白い子だなあっと。そう思っていたら、後ろからまた気配がした。
さっきの子かと、ぱっと振り向くと、そこには違う人がいた。さっきの子と同じくらいの高さの、アジア系の顔の人。
厚めの唇が、赤みをさしていて色っぽさを感じさせる顔立ちだった。
「困ってたみたい・・ケンチャナヨ？大丈夫？」
「大丈夫です、ありがとう・・・・韓国の方？」
「Ｈａｌｆ・・・あなたもレッスン室へ？」
「はい」
「偶然ですね、僕も。一緒に行きましょう・・・あ、可笑しかった？」
「・・・いいえ。日本語上手ですね」
「Ｈａｌｆ・・だから・・フフッ」
どこか照れたような笑い方をする、面白い人だと思った。
「私、愛美（めぐみ）。愛する、美しいって書いて、愛美（めぐみ）」
「Ｌｏｖｅｌｙ　ｎａｍｅ　・・　Ｎｏ，　ｂｅａｕｔｉｆｕｌ（可愛い名前・・いや、美しい、かな？）・・僕は韓国とアメリカの半分こ。ね、目が青っぽいでしょ？慧彬（ヘビン）って言うんだ。漢字は・・難しいからわかんないよ、どうやって言うか・・・へ、ビ、ンね。ケビンじゃないよ」
「ヘビン？随分と用心深い自己紹介・・」
「よく、ケビンって言われるんだ・・まったく・・・」
「とっても日本語が上手いのね・・どこで習ったの？」
「友達から・・タイの人。年上だけれどね。とっても親切な人。

中にいるよ。しばらく会ってなかったけれど、今日また会って驚き・・・」
「タイ？」
「知らない？ノーライシン・パーニット・・・」
「・・ノーライシン？」
「ん～・・確か、愛称はノラだったとかって・・ドラマ出てたってさ。タイの、『ＤＲＥＡＭ　ＯＦ　ＫＩＳＳ』ってやつ？」
「・・分からない・・ごめんなさい」
「構わないよ。さ、行こう」
レッスン室には、背が高く、小麦色した肌の、目鼻立ちがどこか幼い人が立っていた。
手にはなぜか、ホットチョコレートが、２本。
「Ｉｔ　ｄｒｉｎｋｓ？　Ｈｅ　ｈａｓ　ｂｏｕｇｈｔ　ｉｔ．
（飲む？買ってきた）」
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．　Ｄｉｄ　ｙｏｕ　ｒｅｍｅｍｂｅｒ，ａｌｔｈｏｕｇｈ　ｍｅｔ　ａｆｔｅｒ　ａ　ｌｏｎｇ　ｔｉｍｅ？　Ｍｙ　ｆａｖｏｒｉｔｅ　ｆｏｏｄ．　Ｉ　ａｍ　ｇｌａｄ．
Ｗｅｌｌ，　ａｎｄ　ｈｅｒｅ　ａｒｅ　ｔｈｅ　ｃｈｉｌｄｒｅｎ　ｗｈｏ　ｍｅｔ　ａ　ｗｈｉｌｅ　ａｇｏ．　Ｍｅｇｕｍｉ．
（わあ、ありがとう。久しぶりに会ったのに・・覚えててくれたんだね。僕の好物。嬉しいよ。あ、この子はメグミ。さっき会ったんだ）」
「Ｉ　ｔｈｏｕｇｈｔ　ｗｈｅｔｈｅｒ　ｔｏ　ｈａｖｅ　ｂｅｅｎ　ｈｅｒ．　Ｔｈｅｙ　ａｒｅ　ｈｅｒ　ａｎｄ　ａ　ｌｏｖｅｌｙ　ｃｈｉｌｄ．　（可愛い子だね。彼女かと思ったのに・・）」
「Ｓｔｏｐ　ｔｈｅ　ｊｏｋｅ．　Ｈｅ　ｉｎｔｒｏｄｕｃｅｓ　ｈｉｍｓｅｌｆ．　（冗談はやめて。自己紹介をしてよ）」
「俺は、ノーライシン・パーニット。こいつから聞いてるだろ？こう見えて、ちゃんと成人してるんだよ、俺。あと、こいつすっご

い甘党だから、覚えててやって。あ、ちなみにタイ人ね」
「・・・愛美(めぐみ)って言います・・・」
「驚かせてごめん。英語はわかんないの？」
「苦手・・・で」
「・・そっか、了解。気をつけるね」
「・・・え？」
「出来るだけ日本語で話すよ。君がいるところではね」
「・・・ありがとう」
「もう一人来るらしいんだけれど・・」
「・・・え？」
「男の子・・会わなかった？色白な子らしいんだけれど・・」
「さっきトイレに行くって、出て行ったきりさ・・」
「・・・会ったか・・・も・・」
「会った？」
「どこ行くって？」
「いや・・またね、としか・・・」
「・・・そっか・・」
「待とうか・・・ヘビン」
「・・うん」

この後、私たちはとても大きな話を聞くことになるなんて。
私は少なくとも気付かなかったよ。

レッスン　０３

最初は疑ってしまった。自分の耳を、自分の目を。全てを疑ってもなお、夢なんじゃないかって。嘘でしょ、これは――――――。

多分、私が一番驚いていたと思う。統括マネージャーは、クスっと笑い、そのまま要項を話し始めた。

デビューが決まった。要するに、私もデビューに向けて準備を始めるようになったのだ。しかし、それまでの時間はあまりないらしく、残された時間は三ヶ月。それまでに舞台になれて、歌を覚えて、ダンスも。そして、私には一番厄介な、英語が残されている。

「英語にダンスに・・・歌のレッスン・・」

「ボイストレーニングも残っているよ」

「・・・あ～・・・」

「嫌になってきた？」

「ううん・・嬉しいけれど・・・でも、案外、面倒かも・・」

「案外？」

「あ、意外・・思ってもなく？」

「・・ふうん・・・うん、分かるかも・・」

「ヘビンは面倒じゃないの？」

「面倒じゃないよ。寧ろ、楽しみ。こういうの好きだから。あ、もう行かなくちゃ・・僕、Ｓ（エスフォー）－４のダンスレッスンに行かなくっちゃ・・」

「え？」

「舞台慣れするために、バックダンスをしろって。さっき統括マネージャーさんが。僕と、ノーライシンは呼ばれてるから、行くね」

「・・・行ってらっしゃい」

「愛美（めぐみ）は多分、ＫＦｌｙ（ケーフライ）じゃないかな？言われてたと思う・・・」

「あ、ありがとう」
「秦も同じだって」
「ノラ、行く？」
「ああ。じゃあ、また後で。事務所の下のカフェで待ってるから。終わったら、秦と来いよ」
「はい」
「んじゃ、行くか」
「うん。じゃあまたね。頑張って」
「ありがとうございます」
ヘビンさんは、美形だし、優しいし。デビューしても人気が出るんだろうな。
「ナニ考えてるの？」
「え？」
「さっき、愛美、すっごい深刻そうな顔してた。学校のこと？Ｈａｖｅ ａ ｐｒｏｂｌｅｍ？」
「ううん、ちょっと・・不安になって・・・」
「Ｂｕｔ ｄｏ ｎｏｔ ｈａｖｅ ｔｏ ｂｅ ｎｅｒｖｏｕｓ． Ｗｈａｔ ｃｏｍｐｌｉｃａｔｅｄ ｇｉｒｌ．（神経質にならなくていいのに。女の子って複雑だなあ・・）」
「え？」
「なんでもないよ。行こう。あ。」
「何？」
「自己紹介まだでしょ。僕、桐谷 秦。シンって呼んでよ」
「私・・・」
「小守さんでしょ。愛美。聞いてたから、知ってる。よろしくね」
「うん・・・宜しく」

リハーサル室にいたのは、意外にも、同期の子であった。ＫＦｌ

yの、末っ子。ユミであった。長かった、黒髪はすっかり短いボブになっていた。重ったるい印象を受けた、一重は綺麗な二重に整えられていて、すっかり可愛らしく変わっていた。

「・・・・ユミ？」

「・・・あ・・お久しぶり・・・・元気だった？今回のバックって・・・愛美（めぐみ）なの？」

「うん・・私もするよ」

「よろしく。あえて嬉しいなあ・・・」

「すっごい変わったね。綺麗」

「整形したわけじゃないからね。驚かないでよ」

「どうしてるの？」

「うん～、なんだったか、忘れた・・でもいいじゃない。あなたは元々、綺麗な二重なんだし～」

「・・・まあ、そうだけれど・・・」

「・・にしても・・太った？」

「・・・・・・言わないでよ～・・・」

「ああ、やっぱり。こんなに顔、丸くなかったし。もっと可愛かったもん」

「今、ブス？」

「・・・ううん、違うと思うけれど。昔より、ブス」

「じゃあ、やっぱりダイエット頑張る」

「うん、頑張って頂戴・・・あ、もうすぐ先生来るから・・皆も・・悪いんだけれど、１０本ぐらい水、もらってきて」

「分かった」

「ありがとう」

まだ、浮かれた気持ちのほうが大きかった。

レッスン　０４

正直な話。デビューできるんだって、デビューまで手が届きそうだなんて。天に昇るような心もちだった。あれだけ夢みていた世界だもの。歌いたかった、踊りたかった。いつか、スポットライトの当たる、美しいステージで。皆、私を見てよって。

今回の振り付け師は、彼が振付ければ必ず、ブームを呼ぶとまで言われている人だった。アメリカから来た、日本人のジュン・リュージュ。まだ、二十歳だというのに、打ち出したヒットの数は業界史上最多だ。まさしく彼にまかせれば安泰。彼女ら、ＫＦｌｙ（ケーフライ）に何がかけられているのか知らないが、まさしくその彼が呼ばれた。

出で立ちは、優しそうな青年。分厚い緑色のフレームの、メガネをかけているときもあるし。驚くくらいユニークなコンタクトを入れていることもある。大方は、その緑のメガネだけれども。そして、それに似合わないほどの、引き締まった肉体が、彼の職業を証明している。赤黒くこげた肌は、ジム通いの証であろうか。

「あなたたちの、新曲の振り付け担当になりました。ジュン・リュージュです。よろしく。それでは早速、『ｓｕｐｅｒ　ｓｔａｒ』の振り付けを始めます。ＯＫ？」

「よろしくおねがいします」

「Ｋｅｍｉｎ　Ｉｎｉｔｉａｌｌｙ，　ｔｈｅ　ｍｅｄｉａｎ（ケミンが最初、センター）」

「はい」

「Ｔｈｅｎ　ｔｈｅ　ｆａｎ，　ｙｏｕ　ｒｉｇｈｔ（それから、あなた、ファン？右）」

「はい」

「Ａｆｒｉｃａ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｌｅｆｔ．　Ｂｅｈｉｎｄ　ｔ

ｈｅ ｃｅｎｔｅｒ， ａｎｄ Ｙｕｍｉ．（左にリカ。真ん中の後ろが、ユミ）」

「はい」

指示の出されるままに、次々とスタンバイ位置につく、彼女たち。そんな光景が、心のどこかで、もう羨ましくもなんともなかった。

そう、私だって、デビューできる予定なのだから。もう、うらやむこともない。指をくわえて、他人のステージを見ている必要もないんだ。

「Ｏｎｌｙ ｓｈｉｆｔｅｄ ｓｉｎｇｌｅ ｂｅａｔ， ｄａｎｃｉｎｇ Ｋｅｍｉｎ（一拍子だけ遅れて、ケミンが踊りだして）」

「Ｓｉｎｇｌｅ ｂｅａｔ， ｏｒ ｉｓ ｔｈａｔ ｌａｔｅ？（一拍子だけ、遅れるということですか？）」

「Ｏｆ ｃｏｕｒｓｅ． Ｏｔｈｅｒｗｉｓｅ， ａｎｙｔｈｉｎｇ ｔｈａｔ ｙｏｕ ｓａｙ？ Ｓｏ ｉｔ ｂｅｇｉｎｓ．（もちろん。それ以外、何か言ったかな？それでは始めるよ）」

彼、どうやら、思いのほか気難しいらしい。

「Ｎｏ． Ｐｌｅａｓｅ（いいえ・・お願いします）」

アップテンポの今回の楽曲。リズムのベースはどうやら、サンバの類らしいが。かなりレトロチックに仕上がっている風して、エレクトロニックな要素も含んでいるため、かなりステップ自体、凝っているようだった。これは一筋縄にいかないかもしれない。初っ端のステップで、早速と言っては何だが、ユミが躓けた。クロスの後のステップへの展開が上手くいかないらしく、どうやっても一拍以上の遅れが生じる。元々、バラード系を得意とするのだから、無理もないのだが。彼女らは、プロであって、人気アイドル。このダンスレッスンは、あと数回しかない上に、残り時間も2時間をきっていた。しかも始まってからまだ、譜面的にいえば、一枚目を終えていない状態。かなりまずい状態なのは、誰が見ても分かりきったことだった。

「Yumi is difficult to do? Why can not I? Said. Progress.（ユミ、何が難しい？言ってみて。進まないんだよ）」
「I'm sorry. But I know that is（ごめんなさい。分かってはいるんです・・）」
「Yare it. Good, it breaks. White managed so far. Once fully started.（もう、いい。十分後に開始するから。それまでにどうにかしろ。休憩だ）・・・・Other dancers from the rough now teach, and much more. Step is the same.（ダンサー、教えるからやれ。ステップは同じだ）」
流暢な英語に、戸惑いつつも一旦は、どうにかついていくことができた。ステップも振りも一応、理解していたからだ。
「・・・・君、覚えがいい。名前は？」
「・・・愛美（メグミ）です」
「デビューは決まったか？」
「はい。もうすぐ、デビュー予定です」
「そうか。それじゃあ、二曲目は、振り付けをさせてくれ。ヒットさせてあげよう」
「お願いします」
ただ、気をつけたほうがいい。上手い話の裏は、かなりまずい。

終わるのが、遅かったこともあってか。ふたりは二杯目のカフェオレまでも、飲み干してしまっていた。
「遅いなあ・・・寮に帰って寝たい・・・」
「まあ、正直」
「あっちは振り付け師、気難しいオヤジ？」
「いや、ジュンって聞いた」

「ジュン・・リュージュ？」
「正解。知ってる？」
「知ってるも何も。何回か、お世話になったよ。あの人は当たり屋だぞ・・絶対、ヒットする・・・」
「・・知ってるよ・・でも、なんかあったのかな？」
「まあ、気難しい人だし・・」
「気難しい？」
「ん。かなり苦労した」
「・・ノラでも？」
「うん」
「・・・・なんか、それ聞いて余計、ぐったりした。ヤル気・・・・」
「・・・？？？

レッスン　05

レッスンはいつまで続くのかなって、一瞬考えてしまった。邪念であったかもしれないけれど。一瞬、ふっと。これはずっと続くんじゃないかって。棒になってしまいそうなくらい、疲れた足が余計なことを考えさせた。頭の中は、今、座りたいことと、休憩したいことに支配されている。

午後十一時。練習開始から、四時間。ユミひとりが為に、スケジュールをひとつ、ドタキャンすることになった挙句、ジュンの拘束時間も長くなっていた。彼も、この後、仕事を抱えていたのだが。

正直、バックのダンサーたちの苛立ちは募っていた。つい一週間前、バックのメンツは一新されたばかりだから、誰もユミのことを知らないわけだ。最も、舞台やメディアでの、愛嬌あふれる、可愛い姿は知ってはいるものの。こういった素性は知らないという話。ユミは実はかなり物覚えが悪い。ただ、他の人より、愛嬌はあるし、すっぴんでもかなり可愛い。それにかなりスタイルがよく、いわゆる、ボンキュッボンのスタイル。これが面白いくらい自覚があるから、驚きだ。

その自惚れのためか、かなり怠惰な姿は、時折見受けられた。甘えていれば、済むとでも言わんばかりに。

ため息をわざとらしく、つくケミンの姿に驚いた――――――――・・・メディアの前では、あんなに仲もいいのに。頬を寄せ合ったり、一緒に抱き合ったり。本当は、かなり仲違い？

「いい感じじゃないよね」

「・・・リカ・・・」

「デビューしてから、ユミ、変わっちゃった・・もっと練習する子だったのに」

「・・・」
「ソロの仕事も多いしね・・・・四人でＫＦｌｙなのに。これじゃ、３人よ。姉さんたちも、あきれてるみたいだし」
「・・・・そうなの・・・」
「・・・あんたは頑張ってよ。応援してるんだから・・・」
「もちろん！頑張るよ。ありがとう、リカ」
「うん、いいってことよ」
「・・・これいつまでやるんだろう・・」
「・・聞いてきてあげる。バックはもういいはずよ・・待ってて」
「ありがとう」

ため息ばかりが漏れてきた。カフェで待ち惚けを食らっていたにも関わらず、二人は文句も何も言わない。その代わり、遅れてきた愛美はため息ばかり。まるで、かなり疲れている風。
「あれ、そんなに大変だったの？」
ヘビンの声も一瞬、聞こえなかったようで、小首を傾げた。
「大丈夫？何か、言われた？」
「・・・大丈夫」
「大丈夫じゃなさそうだから、ヘビンもそう言ってるんだぞ。言ってみろ」
「あ、そんな言い方しなくていいよ、ノラ」
「・・・・・・気にしないでよ、別にそんなんじゃない・・・」
「・・・愛美も・・・ほら、ノラ、謝って・・そんな突っかかった言い方はダメだよ」
「・・・なんで・・」
「・・・ごめんね、愛美。桐谷、愛美を寮の部屋まで送ってあげて」
「はい」
「・・・ひとりで帰れる」

「夜遅いし、女の子だからね。距離もあるし。はい、よろしく」
「行こう」
「・・・・うん」
「どういう料簡(りょうけん)かって、聞き足そうな顔だね」
黙りこんでいたノラが、やっと口を開いた。
「・・ああ」
「多分、いらいらしてたんだろうね、練習場・・・精神が不安定になっちゃう時期もあるよ」
「それは分かる」
「・・・男じゃないんだ。僕に接するみたいに接してたら、きっとあの子は疲れるだけだよ、余計に」
「・・・ふぅん・・」
「・・・女の子の扱いに慣れてるって言ってなかった？」
「彼女は、いた」
「過去に何人？」
「・・2人・・」
「・・あら・・・・・」
「（あら？）・・・・」
「僕は4人・・・」
「・・お前、中々の遊び人だったんだな、可愛らしい面して。梅毒とかいうオチは・・・」
「ないわ。？　？？（クソ馬鹿）」
「・・・お前の口から、そんなに汚い言葉を聞ける日が来るとは・・・」
「あ」
「・・・まあ、誰も居ないし大丈夫だよ」
「ごめん・・・」
「お前、愛美(メグミ)が気になってんの？」
「・・・え？」

レッスン　06

気になっては、いたと思う。とても可愛いと思えたし、内面も綺麗だったから。好きになるのは時間もかからなかったと思うよ。僕だって、男だからそりゃ、モノしたいだの何だのって。無駄なことも考えるけれどさあ――――――――・・・。

「I'm sure some flowers to take tea bad.（もぎとっちゃだめな、花もあるんだよね。多分）」

彼女は多分、そういう類の女の子なんだろうなって。

コンクリートの打ちっぱなしの寮は、夜見ると、どう見ても廃墟みたいだ。明かりの所々につくばかりで、もの寂しい。自分の部屋のある4階まで階段だと考えると、気も重たくなる。

「はあ・・・・」

「That person, and I do care about it?（あの人・・・気になってんのかな?）」

「・・・え?」

「なんでもない、独り言・・・何階?」

「4階」

「僕、5階だから、一緒に行こう」

「うん」

「忙しくなってくるね・・もう直ぐ」

「うん」

「・・・A fine not（元気ないな・・）・・笑うといいよ」

「え?」

「可愛いと思うからね」
「・・・・」
「笑ってたほうがいい。周りも明るくなれる」
「・・・うん」
「同室、誰なの？」
「あ、いないの。つい最近その子が事務所、辞めちゃったから。空いてる」
「ひとりなんだ」
「うん」
「僕は変なヤツだよ。なんか、意味分かんないけれど。Ｓｐｅａｋ ｔｏｏ ｍｕｃｈ ｇｌｏｏｍ（陰気であんまり喋らない）・・・Ｇｕｙ, ｂｕｔ Ｉ ｔｈｉｎｋ ｉｔ ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ ｆｏｒ Ｎａｎｔｅｓ ｄｅｂｕｔ（あいつデビューなんて無理だと思うけれどな）」
「・・・・暗い人？」
「うん」
「・・・大変ね」
「なんか、カメレオン飼ってるしね・・・くさい」
「・・嫌いなの？」
「においが苦手・・ヘビは好きだけれど・・・」
「私、カメ飼ってるんだけれど・・・タミ子」
「・・・タミ子？」
「うん」
「なんてカメ？」
「・・・もらい物なの。誕生日に・・・分かんない」
「そっか・・そろそろ・・じゃあ、ばいばい。また明日」
「うん明日」
「・・・どこの学校なの？」
「東が丘第一夏目高等学校って分かる？そこ」
「３年だっけ？」

「うん・・・普通科のね」
「・・・・でもあそこ、結構、厳しいでしょ」
「ああ、看護科がね」
「・・・へえ、看護科・・・」
「・・・どうかしたの？」
「いとこが入学する・・・来年・・・看護科・・・同じ苗字だよ。桐谷（きりたに）・・・亜矢（あや）って言う。でもそっか、じゃあ会わないね」
「そうだね・・・」
「じゃあおやすみ。気をつけてね」
「うん、おやすみ」
「あ、これ」
「？」
「あの人のアドレス。メールでも送ってあげなよ。心配してたし。ヘビンさん」
「ありがとう」
ディスプレイには深夜１２時を回った時計が表示されていた。睡眠の邪魔をしないかと、心配になったが、メールだから大丈夫だろうと。勝手に判断して、お礼のメールを入れておいた。

窓の外には何も映っていなかった。今日は満月のはずだったけれど、曇りのせいで何も見えない。折角、心待ちにしていたというのに。何て味気ない。
『ブー、ブー・・・』
バイブ音が、少し素っ気無く響いた。桐谷（きりたに）だろうかと、一瞬思った。しかし、ディスプレイには知らないアドレス。
「・・・誰だろう・・・」
『今日はありがとうございました。おやすみなさい。　メグミ』
「・・・・桐谷（きりたに）か・・・」

教えたのはそいつにしても、随分と気の利いた謀(はかりごと)じゃないか。
少し、嬉しくなってしまった。
「・・・・・・ふふっ」
自分でも気持ちの悪いくらい、笑いが止まらなかった。多分、嬉しいんだと思う。

レッスン　07

陽を浴びすぎると、日陰に入りたくなるのと一緒。有名になりすぎると、無名の自由さが懐かしくなったりする。

爆発的人気で、何をやろうが売れに売れたあのころ、少なくとも俺はそうだった。ＣＤもなんでも売り出せば必ずヒットしたし。どんどんお金は入ってきた。働いているのが馬鹿馬鹿しいくらい。でもそれ以上に、有名になることは随分なスパイスだ。

皆が俺を知っていて、俺を好いている。そりゃアンチもいるんだろうが、生憎、俺はそういう人に出会わなかったみたいで。随分幸せな芸能人生活を送った。

日陰に入りたいと思ったのに。日本に来てまで、日向に引きずり出されるとは思わなかった。

気付かなかったが、かなり前、着信があったみたいだった。携帯のディスプレイ、新着メールの文字がおどっていた。

『２８日の１９時から、顔合わせを行います。マネージャーが決定しました。事務所１階の、ファミレスに来てください。よろしくおねがいします』

内容はかなり事務的であったものの、驚くものだった。まだあまり話も進んでいないと思っていたのに。早くもマネージャーがついたらしい。光栄な限りだ。

「あ、学校行かなくちゃ・・・」

学校へ行って帰っていたら、丁度良い時間だろう。お気に入りのワンピースをクローゼットの前にかけて、寮を出た。

なんとなくワクワクする。心躍るって多分、こういう事を言うのだろう。

日本に来て感じたことはいっぱいある。かなり文化も違うから、馴染むのに時間がかかった。なんていったって、日本語もロクに覚えていなかったから。僕はアメリカで育ったし、生まれもシンガポール。救いだったのは、両親が日系であったことくらい。でも、両親も家で話すのは英語ばかり。父親は中国に会社を持つ人だったから、もう一カ国語話すなら、中国語っていうわけ。正直、高校までは現地のほうで出ていて良かったと思う。きっと、馴染むのに苦労しただろうから。

ダンスと、歌が好きで、すらすらラップを口ずさむ人に憧れた。どうでもいいけれど、至極かっこよく見えたんだ。その理由は今の自分でも分からない。

鏡に映る姿は毎日、変化するわけじゃない。けれど、事務所に入ったあの日から随分、変わって見える。自信いっぱいというか、案外、僕もかっこいいじゃないか。みたいな。空いているリハーサル室に入って、音楽を再生して。もちろん、大好きなグループの曲で。そうして、自分なりにアレンジして踊ってみる。鏡張りのこの部屋は、僕には取っておきの場所だ。自分の動きがどこを向いても、分かる。目さえ開けていれば、僕がいかに踊っているか、一目瞭然っていうわけだ。

ダンスもボイトレも、たくさんレッスンはあるけれど。一番すきなのは、こうやって自由に踊っている時間だと思う。誰にも指図されることなく。誰にも何も言われず。まさしく自由。まるで水を得た魚のように。僕は何時間も踊り続けられた。

でも今日は夜、顔合わせをしなくちゃいけない。だから、深夜までは踊っていられない。シャワーも浴びて、服も変えなきゃならないし。今日はヘンに忙しい。

「（デビューするのも、案外、面白くなかったりして・・？）」

レッスン　08

顔合わせとか言うのは、生まれて初めてなもんだから。良く分からないし、緊張する。おかげで口の中はカラカラ。厳しいマネージャーさんだったら、どうしよう、とか。ちょっと余計かもしれないけれど、いろんなことを考えてしまう。

事務所への道を進む途中、道端の人の集まりを見た。中心には、多分、ギターかなんかを持った青年。ストリートライブの類だろう。アメリカじゃ、ミュージックビデオ撮影以外では、あまり見かけなかったりする。ここが平和な証だ。

そんなことをぼうっと考えていると、遅れそうになった。急がなくっちゃ――――――。

角の席に見慣れたシルエットが映っていた。ちょっと頭の上のほうが映っちゃってる。僕は、ノラの姿を頼りに、その座席を見つけた。

「遅くなってすみません・・あれ？マネージャーさんは？」

「おう・・まだ着てない。遅くなるって、さっき統括の人が言いに来た」

「そっか・・うん。間に合ってよかった」

「シンもまだだしな」

「あ～、だね・・・もう十分前なのに」

「あいつ、マイペースだからなあ・・」

「そうだね」

「愛美（メグミ）ちゃんは？」

「化粧室」

「ああ、そう」

それからしばらくして、おおよそ、五分くらい経った頃、シンが

ふざけた姿で現れた。動物のきぐるみみたいな、あれ。牛の柄が、妙に似合っていなかった。クールに澄ました顔をしていたが、まさかその姿で歩いてきたと思うと、少し笑える。

「・・・シン、どうしたんだ？」

「ダンスしてて。汗かいちゃったんで、服変えたら、なんかいいのがなくって」

「・・・そうか」

ノラすら何ともいえない。この子は天然なのか、確信犯なのか、不思議系なのか、分からない。分からないけれど、理解したいわけじゃない。

「まあ、そこそこしたら、来るでしょ」

「そうだね」

それから、数分後だったと思う。

茶髪で、少し柄の悪めな、大柄の男性が入ってきた。少し風貌が悪い彼は、こちらに向って歩いてくる。まさかって、ことはないよね？

「すまない、お待たせしました。君たちのマネージャーになる、篠原（しのはら）と緒申します。よろしく」

ノラも少し開いた口が塞がっていなかった。何か、見たこともないくらい間抜けで、少し笑えた。

「君たちに、デビューについての旨、要項を説明しに来たんだけれど」

「はい」

「君たちのグループ名はもう決まっている」

「え」

「Ｉ―Ｌｅａｐ（アイ・リップ）だ。インターナショナル、つまり国際的な、リップは、飛躍だ。これからは世界中で活躍してもらうぞ」

「・・世界中」

「君たちは有望株だからなっ、早速明日からデビュー曲のリハに入る、『ｂｅ　ｂｏｒｎ　ａｇａｉｎ』だ。さあ、何でも好きなも

のを食べてくれ。今日は祝いだ」
「ありがとうございます」
「よろしくおねがいします」
「ほお・・・ありがとうございます」
「よろしくおねがいしますね、篠原さん」
「すみませーん、注文を」
とにかく、僕らの物語はここから始まる。

今日が僕たちの無名で、自由の最終日。

レッスン　０８（後書き）

シーズン２に続く・・かも。
一旦、このシリーズはお休みします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8029w/

I am a DOLL

2011年10月19日06時23分発行